

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：32407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02817

研究課題名(和文)再帰代名詞を含むGET構文からの拡張：主語名詞の「働きかけ」の希薄化の観点から

研究課題名(英文)Extension from get-construction with a reflexive pronoun: the Attenuation of Subject NP's Force

研究代表者

市川 泰弘 (Ichikawa, Yasuhiro)

日本工業大学・共通教育学群・准教授

研究者番号：00223090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では再帰構文を含むget構文に着目し、中村(2004)の「再帰代名詞への働きかけの希薄化」によって認知構造が拡張するという仮説を立てた。構文はget + oneself + X (Xは形容詞・過去分詞・不変化詞)とした。同構文の拡張は当該動詞の意味概念が限定されるため、一部中村(2004)の5段階の概念構造すべてを持つことはなかったが、他の動詞も含めたV + oneself + X構文では細かな拡張段階があることが明確になり、通時的資料では細かな拡張の順番と同じ順番で生じていた。結論として「主語の再帰代名詞への働きかけの希薄化現象」が明確に存在し、その希薄化が漸次的に生じることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、人間が生得的に持つ言語能力を解明するアプローチの一つである拡張理論(言語習得を考慮に入れた文法理論)と認知言語学的アプローチによって英語の基本的動詞であるGETと再帰代名詞が生じる構文を分析し、この分析が通時言語学的資料によって確証されることを示している。このことは言語能力の一部が人間の言語の歴史的発達と共通していることを示し、言語における人間の歴史的発達(系統発生)と人間この言語能力での拡張(個人の言語の発達)に類似点があることを示唆し、今後の人間の言語の発達が他の認知的発達と関連する可能性を示している点で学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：We shed light on a construction with the verb get and a reflexive pronoun, 'get + oneself +X' construction, and claimed that there existed a derivation of its cognitive structures by the attenuation of Subject NP's force to its reflexive pronoun. The category X includes adjective phrases, past participles (V-en) and particles. We found that the constructions with adjective phrases and past participles as X have derivative cognitive structures proposed in Nakamura(2004) respectively, while the construction with particles as X has some of these derivative structures because of the meaning property of get. We examined constructions with the verb and a reflexive pronoun, 'V + oneself + up / down' constructions as well, and revealed that they have derivative cognitive structures and Subject NP's force is attenuated more gradually. We also proposed the revised version of the attenuation of Subject NP's force to its reflexive pronoun.

研究分野：英語学

キーワード：語彙/意味 認知構造の拡張 拡張理論(動的文法理論) 歴史的発達

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

語彙の意味/用法の研究は歴史の変遷の考察や生成文法に於ける語彙形成、さらに認知言語学的アプローチに基づく語彙の概念構造などが行われてきていた。また動的文法理論(拡張理論)での言語外の情報を利用した言語能力の拡張という考えの基での語彙拡張も研究されてきていた。(Asakawa 1994)このような状況の中で平成22~24年に科学研究費補助金基盤Cで採択された「GET: 語彙の意味概念について 認知的アプローチと概念拡張」において、拡張理論に基づき、認知的アプローチでの意味概念の捉え方を用いて *get* の意味を精密に示し、それぞれの意味概念がどのように拡張されていくかを分析した。その延長線上で *get* と再帰代名詞を含む構文が認知構造において興味深い特性をもっているのではないかと考えるようになった。そこで Nakamura(2004)の再帰構文と再帰中間構文における再帰代名詞の働きかけの希薄化と *get* を用いる受動構文の拡張について研究を進めた。(市川 2017a)さらに *get* という動詞と再帰代名詞が共起する構文の中で「主語の再帰代名詞への働きかけの希薄化」がどのように進んでいくかを考察したいと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究では英語における構文は人間の認知発達と関連して意味概念(認知構造)が拡張していくものがあると考え、(1)語彙概念が拡張する時期(誕生~10歳前後)に構文拡張の規則性が存在するのか、(2)その規則性は人間の認知と関連しているのか、(3)歴史的な語彙発達と言語習得での語彙の意味概念の拡張(獲得)には関連性が存在するのかどうかを明らかにする。研究にあたっては対象とする構文を「*get* + oneself + X 構文(再帰代名詞を伴う構文としても生じるもの)と *get* + X 構文のうち意味としては範疇 X の状態へ変化するという構文」とし、実際の言語習得過程の中でどのように当該構文が使われているのか、また通時的観点から文献データのなかでどのように使われはじめていったのかを調査し、Kajita(1977)他や中村(2004)が提案しているアプローチに基づいて研究した。

### 3. 研究の方法

- (1) *get* を含む構文がどのような意味・用法で使われてきたのか、それぞれの構文がいつ生じ、その意味が時空列でどのように変化してきたのかを以下の文献の記述を調査した。また、理論的基盤を固めるため、先行研究を概観した。William Bullokar, *Pamphlet for Grammar (1586)*, Lindley Murry, *English Grammar, English Grammar, adapted to the different classes of learners; With an Appendix, containing Rules and Observations for Promoting Perspicuity in Speaking and Writing (1795)*, Robert Lowth, *Short Introduction to English Grammar*, Cobbett, W. *A grammar of the English Language, in a series of letters (1820)*, Pinneo, T.S. *Pinneo's Primary Grammar of the English Language(1869)*Declerck, R. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English(1991)*, Hornby, A.S. *A guide to patterns and usage in English(1962)*, Huddleston, R. & G.K. Pullum *The Cambridge Grammar of the English Language(2002)*、Jespersen, O. *A modern English Grammar(1914-1949)*, Quirk, et al. *A grammar of contemporary English(1972)*, Zandvoort, R.W. *A handbook of English grammar (1964)*  
Oxford English Dictionary に記載されている *get* を含む例文を抽出し、それぞれの年代ごとにどのような構文が生じているか、またテーマとなっている再帰代名詞を含む例文がどれくらいあり、それぞれの生起年代がどのようにになっているかを調べた。
- (2) バージニア大学電子図書館など、インターネットを介して電子図書館に所蔵されている現在までの文学作品、雑誌、研究書などにおいて当該語彙のそれぞれの意味用法がどのように生起しているかを年代順に調査した。また、その他のイギリスで出版されている *Here's Health* を電子データに変換して、各語彙がどのように生起しているかを調査した。さらに大英図書館およびスコットランド国立図書館で英語資料(文学作品などとは異なる日常生活で使われていた英語資料 - 私信としてのレターや新聞・大衆雑誌など - の中で閲覧が制限されている資料)を現地で閲覧・収集した。
- (3) 収集したデータの中で比較的出現数の多い *get* + oneself + 不変化詞で「主語の再帰代名詞への働きかけの希薄化が存在するかどうか分析を行った。さらに当該構文および *get* 以外の動詞と再帰代名詞 + 不変化詞が生じる文の生起状況ついていままで収集した資料および British National Corpus、Collins Wordbanks、Corpus of Historical American English

(COHA)、Corpus of Contemporary American English(COCA)を調査し、分析した。加えて言語習得過程での幼児・児童の発話を集めた CHILDES および Tomasello(1992)のデータの中で当該構文の生起はどのようになっているのか調査した。

- (4) これまで収集したデータの中で出現頻度の高かった *get* + 再帰代名詞 + 不変化詞(*up*, *down*)と *V* + *oneself* + 不変化詞における「主語の再帰代名詞への働きかけの希薄化」の存在を明らかにし、この希薄化が一つの原理であると捉え、精密化を行った。

#### 4. 研究成果

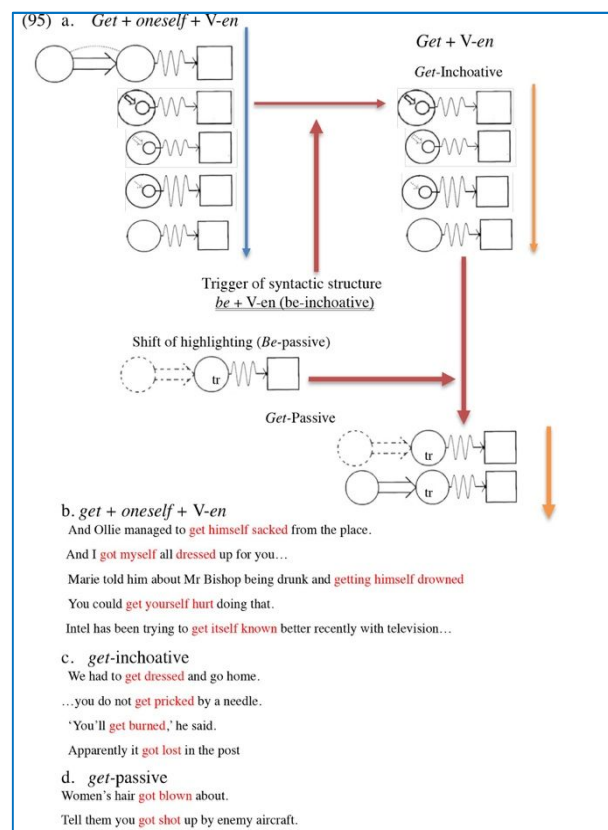
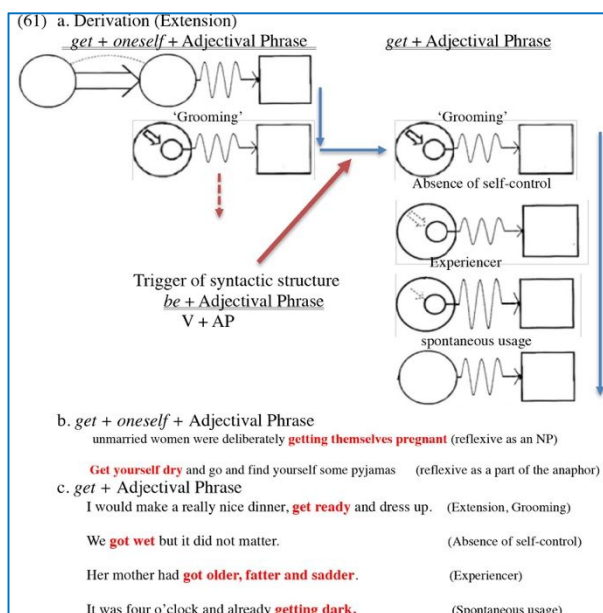
- (1) 再帰代名詞を含む GET 構文に関して Ballokar (1580) では *get* を用いた用法が示されていたが、再帰代名詞を伴う例は示されていなかった。Murray (1816)では2重目的語を取る例文、副詞、名詞等を取る文は示されていたが、再帰代名詞を伴う例文は生じていない。Cobbett (1819)では文章中に *get* (過去形、分詞も含む) が23生じ、名詞、副詞、過去分詞形容詞、前置詞等を伴っていたが、再帰代名詞を伴う例文はなかった。Pinneo (1869)では通常の *get* の用法への言及はあったが、再帰代名詞を伴う用法は示されていなかった。Maetzner (1874)では名詞、形容詞、過去分詞形容詞が生じる例が示されていたが、再帰代名詞を含む例文は生じていなかった。このことから19世紀までの文法書では再帰代名詞を含む構文は型式としては認識されていなかったと言える。次に OED に記載されている *get* を含む例文の中で再帰代名詞を伴う文を抽出したところ、125例あった。最も早い段階で生じたのは1662年に *get himself out of sight* という表現であった。再帰代名詞の後に生じる範疇は名詞句(28例)、前置詞句(23例)、不変化詞(11例)、形容詞句(4例)、動詞の過去分詞(形容詞用法も含む:59例)があった。再帰代名詞別では、*himself* は56例、*herself* は19例、*myself* は15例、*yourself* は2例、*themselves* は15例、*ourselves* は6例、*yourselves* は1例だった。
- (2) 1997年から2017年にかけて出版された雑誌は Here's Health80冊をPDF化し、その中で *get* + *oneself* 型の生起状況を調査した。次に8月26日から9月6日にかけてイギリスの大英図書館およびスコットランド国立図書館で閲覧可能な英語資料を収集した。2つの図書館では1377年から1913年までの文献を収集し、PDFとして9007ページ、画像として9746枚分を収集した。

The General Evening Post, A Survey of Sraffordhire(1820), The Gentleman's Magazine(1731, 1735, 1750, 1770, 1771, 1778, 1804, 1816, 1829, 1833), Journal of The United States Canalry Association(1888), A kind of Compassion Admonition(1706), Reflections of The Management of the People(1704), The Christian Monitor Containing Earnest(1703) The British Poets Vol.1-IV(1773), Ordinance Survey of Scotland (1860), The Life and Most Surprisingof the Kent East Indiaman(1830), Monimia(1795), Loss of the Kent East Indiaman(1831), Shifting winds(1866), History of the Heathen Gods and Heroes Antiquity(1798), Scottish Post Office Directions(1825-6), Biggar and The House of Fleming(1867) Genealogical Memoir(1808), Historical Memoir of the Family of Eglinton and Winton (1864), An Historical and Genealogical Account (1838), An Essay of the Origine of the Royal Family (1722), Historical Memoirs of Rob Roy (1818), True and Correct Narrative of the Dreadful Burning (1852), Melancholy Loss(1813), Remarkable Account of Shipwreck(1834), Melancholy consequence of two sea storms(1771), Accidents and Disasters on land(1828), Shipwrecks and disasters at sea(1828), Account of the dreadful accident and great loss(1828), Awful phenomena of nature(1828), The loss of the Comet steam-boat(1826, Four excellent new songs(1805), The Hermit of warkworth(1846), Wonderful account of Mr. George Spearing(1803), Wonderful and surprising narrative of Capt. John Inglefield(1785), Loss of the steamship Orion(1850) Drowned Mariner(1790), Hermit of Warkworth(1840-50), Loss of the steamship Forfarshire(1840-50), Middlesex flora(1812-20), A wonderful account of Mr. George Spearing(1825), Dreadful narrative of the loss of the Kent East Indiaman(1840-50), Wonderful account of Mr. George Spearing(1825), Latest account of the loss of the Comet(1825),Dreadful narrative of the loss of the Kent(1840-50) The British Poets Vol.

I(1773) Diary of Alexander Jaffray(1614-), A Selection from the papers of the Earls of Marchmont vol. I(1685-1750), A Selection from the papers of the Earls of Marchmont vol. II(1685-1750), A Selection from the papers of the Earls of Marchmont vol. III(1685-1750), The Diary of Mr John Lamont(1649-1671), The Family of Coghill(1377-1870), The Gordons of Nethermour(1913), History of the Carlile Family(1909), Campbell Letters(1559-1583)

収集した文献に *get* + 再帰代名詞 + X の形式の出現を調べたが、8 例（名詞、形容詞、前置詞、過去分詞）が存在したが残念ながら不変化詞が共起する例は存在しなかった。

- (3) 最初に *get* + *oneself* + AP と *get* + *oneself* + V-en 構文で認知構造の拡張が生じていると主張し、この拡張が「主語の再帰代名詞への働きかけの希薄化」によって生じ、最終的に再帰代名詞が消失していくと主張した。



- (4) 次に *get oneself up* および *V oneself up/down* の構文（構文）における認知構造の拡張について分析した。これらの構文を分析する際には中村(2004)が提案した希薄化よりもさらに細かく分けた希薄化で捉えることとした。これらの構文の認知構造を希薄化の観点から捉えると次のようになった。

認知構造の拡張	<i>get</i> + <i>oneself</i> + up	V + <i>oneself</i> + up	V + <i>oneself</i> + down
全体			
体の部位「身嗜み」(外見の変化)			
体の部位「意図的な立振舞」 (移動のない状態変化)			
意図性のある移動			
体の部位 「意図性のない(減少した)立振舞」 (移動のない状態変化)			
意図性のない(減少した)移動			
働きかけのない身体的状態変化			
働きかけのない心的状態変化			
働きかけのない部分的变化			
働きかけのない全体的変化			

*get* + *oneself* + up 構文では COHA, COCA(1827-2019)の中で 177 の文が生じ、また V + *oneself* + down 構文では OED, COHA から合わせて 2394 の文が抽出できた。これらの文の中で提案し



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 市川 泰弘	4. 巻 28
2. 論文標題 UPの認知構造について：言語習得と拡張理論の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 artes liberales	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川 泰弘	4. 巻 -
2. 論文標題 Get +V-en構文の拡張と幼児の言語習得について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ことばのパースペクティブ	6. 最初と最後の頁 344-355
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川 泰弘	4. 巻 31
2. 論文標題 再帰代名詞への働きかけの希薄化について：V + oneself + down構文を例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Kanazawa English Studies	6. 最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川 泰弘	4. 巻 49
2. 論文標題 Get + oneself + upに関する覚書き：主語名詞の働きかけの希薄化の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本工業大学研究報告	6. 最初と最後の頁 195-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川 泰弘	4. 巻 30
2. 論文標題 V + oneself + up構文に関する一考察：主語名詞の再帰代名詞への働きかけの希薄化の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 artes liberales	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 市川 泰弘
2. 発表標題 「V + oneself + upに関する一考察」
3. 学会等名 金沢大学英文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 市川 泰弘
2. 発表標題 V + oneself + down構文に関する一考察－再帰代名詞の働きかけの希薄化と構文拡張 通時的観点から
3. 学会等名 日本認知言語学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 堀田優子、濱田英人、村尾治彦、轟里香、谷口一美、岩崎真哉、市川泰弘、森貞、川島嘉美、小林隆	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 552
3. 書名 ことばのパースペクティヴ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----